

## 2014（平成26）年度 東京大学 入試問題 第1問 解答例

- 一 落語家も精神分析家も、人生上失敗できない仕事として他者とただ一人で対峙する際、孤立無援の感に圧倒されるということ。
- 二 落語家の演じる自己は、互いが互いの意図を知らない複数の登場人物たちへと各瞬間に徹底的に同一化し続けるということ。

\*落語を含む「すべて」のパフォーミングアートにみられる「離見の見」の分裂があり、「しかも」という添加の後に、「他のパフォーミングアートにはない」、落語固有の分裂が述べられている。すなわち、「見る自分」とは異なる「演じている自分」の側の、さらなる分裂としての「複数の他者」への分裂が傍線部の意味である。したがって、この解答は、その二段階の形を説明できている必要がある。

- 三 本質的に分裂している人間が、自律的に作動する複数の自己の対話と交流を通じ、統一的自己の可能性を体験するということ。

\*「ある種の錯覚」（ここでの「錯覚」は、「誤り」を意味していない）や、「何か希望のようなもの」という比喩的表現をそのまま解答に採用しないのは当然として、一方で、それが比喩として成立する根拠である類似性は解答に反映させる必要がある。「仮想的に『ひとりの人間』を体験しうる」といった意味が出ていればよい。

- 四 人物たちに同化する落語家同様、分析家も、実際精神分析状況では、患者の自己の複数の部分に同時に同化しているということ。

- 五 落語を観る喜びの中核に分裂を楽しんで演じる孤独な落語家を見る楽しみがある。同様に、孤独な分析家が患者と同一化する分裂から立ち直り、自身の視点で患者を理解する生きた人間のあり方に患者は癒され、一人の自律的な人間である可能性をも見出しうるから。（一二〇字）

\*「共通点」は、「孤独」「分裂」「ひとりの人間」の三点。

- 六 a 稼 b 慰 c 脅 d 情緒 e 契機